大場飛行士の功績を郷土の誇りとして残したい。

大場飛行士を秋吉で迎えた

前田利雄さん（90歳・秋吉）

大場飛行士を乗せた飛行機は、河ケ谷の方から秋吉に向かって飛んできました。当時わたしは小学1年。誰も飛行機を見たことがない時代でした。はじごを組んだような形で「あれが飛行機か。あんなものでよく飛んできたな」と思っていました。

飛行機は、まず両親が眠るお墓の上空で三回ほど旋回してからこちらに向かってきました。はざや火の見やぐらにぶつかるのではないかと心配するくらいの低空飛行で、耳をつんざくほどの大きな音でした。

飛行機が近づくと、手を振っている大場さんがはっきりと見えました。みんなは歓喜して「バンザイ、バンザイ」と日の丸の旗を振り、声援を送りました。

当時、辺り一帯は麦畑でした。秋吉尚武会（青年団）の皆さんが、麦畑にムシロで「バンザイ大場」と大きな文字を作り、はざにはキリコの天幕や太鼓幕を広げていました。

大場さんは、飛行機から5色のビラをまきました。子どもたちは、飛び回ってそのビラを拾い集めていました。

前代未聞の郷土訪問

大場さんは、貧しい家庭に育ち、非常に苦学をしていました。松波尋常高等小学校のころから大空に対するあこがれを持ち、大きな夢と希望を抱いて上京されたのです。そして、独学で航空隊入学試験に挑戦し、2回目で狭き門に合格しました。

奥能登初の飛行士となった大場さんは、関西水上飛行大会で2等となり、賞金2500円を手にしました。家一軒の建設費用が800円の時代です。大場さんはその賞金で飛行機と整備士を借り上げ、郷土訪問飛行を実現させたのです。

秋吉だけではなく、木郎村、珠洲郡、石川県をあげての歓迎でした。当時はまだ子どもでよく分からないこともありましたが、今思うと本当に前代未聞のことを成し遂げた人だったと誇りに思います。

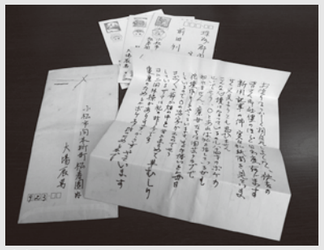
終戦後、大場さんは秋吉に戻り、農業にいそしんでいました。先見の明があり、肥料設計や苗代づくりなど、いろいろ教えてもらいました。ラジオや時計が壊れると直してもらったり、大工仕事も上手でした。

特に花が好きで、次々と新しい品種を栽培していました。大場さんからスイートピーを初めて見せてもらったことはいまだに覚えています。

小松市の施設に入ってからも年賀状や手紙のやりとりをしていましたが、毎日花作りを楽しんでいたようです。

郷土の誇りとして

わたしの夢は、秋吉に「郷土訪問飛行　大場飛行士生誕の地」という記念碑を作ることです。大場さんの功績を、郷土の誇りとして後世に伝えるために、町や地域の人の協力をお願いしたいと思っています。



大場辰男氏から前田さんに送られた手紙や年賀状

特集 空

郷土の英雄を語り継ぎ地域活性化につなげる秋吉公民館

大場飛行士をしのんで、毎年行われている紙飛行機大会＝平成16年のさくら祭りで

秋吉公民館は秋吉、河ケ谷、清真、九里川尻地域の公民館。各種教室やイベントが毎日のように開催され、たくさんの人が訪れている。

「この地域は公民館活動が非常に盛んです。地域の皆さんも積極的に行事に参加してくれたり、惜しみない協力をしてくれるので、本当に感謝しています」と話す公民館長の竹中省三さん（72歳）＝秋吉＝は、本年8月から秋吉公民館長を務めている。

竹中さんは世代間交流学級生でもあり、大場飛行士の資料制作にも携わってきた。それだけに、大場飛行士の功績をしっかりと後世に伝えていきたいという思いは強い。

紙飛行機大会をたくさんの人が集まる大きなイベントに育てたい。

秋吉公民館長
竹中省三さん（秋吉）

地域全体で盛り上げていきたい

「わたしが公民館長になってやりたいと思ったことが、大場飛行士のことです。資料を作ってから10年近く経過し、最近は大場飛行士を知らない子どもたちも増えてきました。まずは郷土訪問飛行の写真や解説などを大きなパネルにして、公民館を訪れる小学生に分かりやすく伝えられればと思っています。パネル制作は、できるだけ多くの人にかかわってもらうなど、地域全体で盛り上げていきたいと考えています」

秋吉公民館は、平成12年の資料制作後、毎年大場飛行士をしのんで紙飛行機大会を開催したり、子ども向けの紙芝居を作って披露したりと、大場飛行士の郷土訪問飛行を語り継ぐ活動を展開してきた。

「特に紙飛行機大会は、この地域の子どもたちだけではなく、もっと多くの人に参加してもらえる大会にしたいと考えています。町の協力も必要になるかもしれませんが、大場飛行士はこの町の誇りです。もっとたくさんの人に関心を持ってもらえるよう、みんなで知恵を出し合いたいと思っています」